

令和 2 年度
東京大学附属図書館外部評価報告書

令和 3 年 1 月
東京大学附属図書館

目次

・はじめに	1
・評価・提言	2
・令和2年度東京大学附属図書館外部評価委員会委員	6
・令和2年度東京大学附属図書館外部評価委員会	7
・資料	
附属図書館の現状と課題	9
学術情報基盤の整備	22
総合図書館視察に替えて	28

はじめに

今回の外部評価は、令和元(2019)年度に行った、平成25(2013)年度から平成30(2018)年度までを対象とした自己点検評価を受けて実施したものです。

平成26(2014)年度から始まった総合図書館の耐震改修・機能向上のための工事は、当初、本年7月末に全工程が完了する予定であり、外部評価委員をお願いした、伊東直登(松本大学図書館長)、加藤晃一(新潟大学学術情報部長)、羽入佐和子(お茶の水女子大学名誉教授、前学長)、深澤良彰(早稲田大学理工学術院教授、前図書館長)の4氏には、竣工後の総合図書館を実際に見ていただいた上で評価をお願いしたいと考えておりました。

しかし、新型コロナウイルス感染症という予期せぬ事態の発生により、工事とその後の館内整備スケジュールに大幅な遅延が生じ、移動や会合の抑制を必要とする状況が年度後半になっても継続したため、実際に施設を見ていただくことを断念し、視察をプレゼンテーションに替えるなどした上で、オンライン会議の形式で実施させていただくこととしました。この件に関しまして、改めて外部評価委員の方々にお詫び申し上げます。

総合図書館の改修に関しては、濱田純一前総長が示した「行動シナリオ」の「国際化の推進」「学部教育の総合的改革」「タフでグローバルな東大生」に加えて、五神真総長の掲げる「基礎力の涵養」「知のプロフェッショナルの育成」、あるいは平成27(2015)年に発表された「東京大学ビジョン2020」で示されている「新たな価値創造に挑む学術の戦略的展開」の中の「国際的に卓越した研究拠点の拡充・創設」や「学術の多様性を支える基盤の強化」を形にしたものと言えます。

また、古田元夫前々館長、久留島典子前館長の下で、平成25(2013)年に「新図書館計画」が策定され、そこでは特に「電子図書館と伝統的図書館の融合」「研究機能を持つ図書館 世界最高水準のアジア研究図書館の開設」を実現すべく、整備を行なうことが定められています。今般の大改修工事は、このような計画を実現するものでもありました。

今後は、この改修工事が完了した図書館により「国立大学図書館協会ビジョン2020」を意識した様々な施策を実施すべく、尽力してまいりたいと考えておりますが、外部評価により、当館の活動で不十分な点を多数ご指摘いただきました。

お忙しい中、必ずしも評価材料を十分にお示しできなかったにも関わらず、貴重なご指摘をいただきましたことに、改めて御礼申し上げますとともに、頂戴したご指摘を活かし、東京大学附属図書館の活動を充実させたいと考える次第です。

令和3年1月

東京大学附属図書館長 熊野純彦

評価・提言

新型コロナウイルスの影響により、オンライン会議形式での実施となり、残念ながら改修工事が完了した総合図書館を実際に視察することができなかった。視察に替えるプレゼンテーションを含め、3つのプレゼンテーションが行われたが、それぞれのプレゼンテーションに対して、以下のように評価・提言する。

1 「附属図書館の現状と課題」に関して

1.1 アジア研究図書館

アジア研究図書館を設置することに加えて、図書館に研究職を配置し、サブジェクト・ライブラリアンの役割を担わせることは、今後の研究支援の形として大きな期待ができる。

他大学でサブジェクト・ライブラリアンを置くとすれば、教育研究部局の所属にすると思われるところ、図書館に研究部門を創設し、附属図書館の所属としたことは画期的と言える。また、図書館職員との協働により、我が国におけるサブジェクト・ライブラリアンという職種の普及するために行われる活動に期待したい。

ただし、「アジア」と枠を設けたとしても、総合大学に置かれるサブジェクト・ライブラリアンが3名というのは、十分な人数でないことは明らかであり、「アジア」という範囲外、自然科学系も含めた多くの分野に広がることを期待する。

これまで国内の大学では、助教がサブジェクト・ライブラリアン的な役割をしてきた側面があるが、助教の人数が減少している。東京大学では若手研究者育成のため、助教の人数の維持に努めているとのことであり、サブジェクト・ライブラリアンの分野を広げるには、それらの助教が、より明確にサブジェクト・ライブラリアンの役割を担う制度を構築することも一法と考えられる。

また、サブジェクト・ライブラリアンの設置の背景としては、事務系の図書館職員による研究支援が十分ではないという判断もあるようであり、サブジェクト・ライブラリアンが置かれた後は、業務分担をするのではなく、事務系の図書館職員もサブジェクト・ライブラリアンの業務が担当できるように、相互の連携が重要になると考える。

なお、サブジェクト・ライブラリアンが置かれる研究部門は時限の設置であり、配置されるサブジェクト・ライブラリアンも任期付とのことであるが、期限と同時に研究部門が解体とならないように努められたい。

1.2 共働する一つのシステム

「共働する一つのシステム」の理念のもと、学内30の図書館室が統一的に動くように努められているが、部局としての附属図書館は、各研究科等の図書館室の職員に対して指揮

命令権を持たない点で、職員の育成も系統だったものになっていない。人材育成は主に OJT によるとのことであるが、業務処理の方法の完全な統一が困難である以上、OJT による人材育成には限界があるものと考えられる。この点、人的資源のみならず、情報資源なども、さらに活用できる余地がある。

一方、公共図書館で導入が進んでいるレファレンス等の重要業務の委託はされていない点は評価できる。ただし、それらの業務を行いうる職員の育成は必ずしも十分とは言えず、特にレファレンスについては大学院生に雇用も一法ではあるが、どのように職員が関与するかが課題と言える。

1.3 オープンサイエンスへの寄与

各大学ともオープンサイエンスの重要性は認識しているが、どのように実現するかが課題である。東京大学においては、論文等のエビデンスデータは部分的にリポジトリで対応しているとのことであるが、論文等になる以前の生データが組織的に保存され、必要に応じて公開される必要がある。

組織が大きいことで業務分担が細分化されている面もあり、多方面への調整が必要と思われるが、図書館がオープンサイエンスに関与し、細分化が進む研究分野間の交流に寄与されることを期待する。

2 「学術情報基盤の整備」に関して

電子ジャーナルについては、令和 3（2021）年度から令和 7（2025）年度を第 4 期として、平成 28（2016）年度から令和 2（2020）年度の第 3 期の購読タイトルを原則として維持されるということで、大学として大変尽力されている。

期間内は購読タイトルを変更しないという方針については、重要な雑誌が刊行されることもあるため、一考の余地はあるものの、制度の安定という視点からはやむをえないと言える。

また、電子ジャーナルについては **Read & Publish** が注目されているが、これまでの、図書館は読むための購読料を支出し研究者は出すための投稿料を支出してきた構図が崩れる。**Read & Publish** 契約に移行し、購読料と投稿料を図書館が支出する場合には、これまでのパッケージ契約以上に細やかな学内調整が必要になる。**Read & Publish** はオープンアクセスや APC（Article Processing Charge）の問題にも大きく関係しており、これらの問題に関して、全国の大学に対する、よい前例を示されることを期待する。

3 「総合図書館の視察に替えて」に関して

3.1 バリアフリー対応

学習の多様化への対応として、大学施設のバリアフリー化が重要な問題となっているが、総合図書館においては、改修工事に伴い、本館東側の個室ブースをはじめとして、全館的に車椅子での移動に配慮された構造とされたことに加え、同じく東側 3 階の閲覧席には火災等を光で知らせる装置が設置され、基本構造が約 90 年前（1928 年竣工）に建てられたという制約がある中で、最大限に配慮されていると言える。

また、東京大学内で拠点図書館と位置づけられる 3 館（総合図書館、駒場図書館、柏図書館）では、バリアフリー支援室と連携しつつ、視覚に障害を持つなどした利用者に向けた資料の電子化が行われており、適切に対応できていると評価できる。

3.2 社会に開かれた図書館

学外者の利用に関して、柏図書館は地域貢献を強く掲げ、「柏図書館友の会」を作り、地域住民等の利用に供されている。一方、総合図書館においては、従来から所蔵資料を利用する場合については可能としており、相当数の卒業生の利用がある。都心に立地していることを考えると、在学生が利用する座席の確保などで難しい面はあるものの、さらに利用条件を緩和する方向での検討に期待したい。

そのような中で、別館ライブラリープラザでのイベントへ学外者が参加する場合や、本館に新たに設けられたオープンエリアでの展示などを観覧する場合などで、入館条件が緩和されたことは評価できる。

学外者の利用に関連しては、総合図書館では UTokyo WiFi のほか、eduroam が利用可能であり、学外研究者の利用にも配慮されている。

3.3 ラーニングコモンズ

2010 年代、多くの大学で図書館にラーニングコモンズが整備されたが、東京大学の総合図書館においては、別館のライブラリープラザがそれに当たる。別館建築前は、総合図書館は基本的に「静かな図書館」であったが、別館の竣工を経て、さらに改修工事が完了したことにより、会話可能な空間と静寂な空間とを区分けされ、利用者の多様な要求に応えられるものになっている。

3.4 資料保存

別館には自動書庫が備えられており、貴重な資料の保存に十分な対応がされているが、自動書庫を導入した図書館の多くで維持費が課題となっており、十分な維持費が確保できないことから空調を停止し、自動書庫内の資料にカビが発生するという事案もある。東京大学以外に所蔵がない資料も存在することから、適切に資料が保存されるよう維持費の確

保に努められたい。

3.5 災害対策

約 90 年前（1928 年竣工）の建物で、当時の基準での建築となっているが、改修を重ねることで防火対策や避難経路の整備が行われてきた。総合図書館の書庫は本館の貴重書庫、別館の自動書庫ともに地下に設けられており、両書庫ともに不活性ガスによる消火設備を備え火災に対しては十分な配慮がされていると考えられるが、近年、集中的な豪雨等による水害が増えている。集中的な豪雨を想定した設計となっているとのことであるが、「想定外」が多発している事実もあることから、歴史ある東京大学が所蔵する貴重な資料の保存には、なお一層の配慮が望まれる。

長期間の改修工事で、利用者の動線が毎年のように変わっていたという事情もあり、利用者も参加する形での避難訓練が行われていないとのことである。改修工事が完了し、利用者の動線も確定したことから、建物が大きく構造も複雑な総合図書館においては、実際の災害を想定した避難訓練の実施が望まれる。

4.まとめ

大学図書館には、単に研究支援にとどまらない、全学の研究教育を創出する活動が期待されている。各研究科等の部局と連携協力し、研究材料を図書館が提供できる体制の構築に期待したい。

そのためには、「附属図書館の現状と課題」に関してでも述べたところであるが、各研究科等の図書館室との組織的縦割解消により図書館が一体となることが重要と考えられる。

今回の外部評価は新型コロナウイルスの影響により、オンライン会議方式で行われたが、単に外部評価だけの問題ではなく、多くの大学で入構が制限され、同時に図書館の利用が停止となり、授業もオンラインで行われるという事態となった。そのような事態への対応として、急遽、電子書籍の契約を進めた大学図書館も少なくない。電子リソースの充実による非来館型サービスの強化や、来館を前提とした施設や設備の在り方など、他大学に先行した活動に期待したい。

最後に、今回の外部評価は、平成 25（2013）年度から平成 30（2018）年度までを対象とした自己点検評価を受けてのものであるが、第 3 期中期目標・中期計画の平成 28（2016）年度から令和 3（2021）年度までの期間と一致していない。図書館が大学全体の動きの中で目標を掲げ、その目標に基づき活動していくという観点から、両者の期間を一致させることを検討されたい。

令和2年度東京大学附属図書館外部評価委員会委員

(五十音順)

伊 東 直 登 松本大学図書館長

加 藤 晃 一 新潟大学学術情報部長

羽 入 佐 和 子 お茶の水女子大学名誉教授, 前学長

(※委員長) 深 澤 良 彰 早稲田大学理工学術院教授, 前図書館長

令和2年度東京大学附属図書館外部評価委員会

日 時: 令和2年10月29日(木) 14:00-17:00

場 所: オンライン

出席者: (外部評価委員(五十音順))

伊 東 直 登

加 藤 晃 一

羽 入 佐 和 子

深 澤 良 彰 (委員長)

(東京大学附属図書館)

熊 野 純 彦 附属図書館長

江 川 和 子 附属図書館事務部長

森 一 郎 附属図書館総務課長

久 保 田 壮 活 附属図書館情報管理課長

大 澤 正 男 附属図書館情報サービス課長

樋 口 秀 樹 附属図書館柏地区図書課長

井 上 恵 美 教養学部等図書課長

日 程: 14:00-14:10 開会

- ・館長挨拶
- ・資料確認・日程説明
- ・委員等自己紹介
- ・委員長選出

14:10-15:15 東京大学附属図書館の説明(プレゼンテーション)

- ・附属図書館の現状と課題
- ・学術情報基盤の整備
- ・総合図書館視察に替えて

15:15-15:25 小休止

15:25-16:55 評価

- ・質疑応答
- ・評価まとめ
- ・講評

16:55-17:00 閉会

・館長挨拶

資 料:

- ・令和元年度東京大学附属図書館自己点検評価報告書
- ・附属図書館の現状と課題
- ・学術情報基盤の整備
- ・総合図書館視察に替えて



附属図書館の現状と課題

2020年10月29日

事務部長 江川和子

内容

1. はじめに

- 1 東京大学の概要
- 2 東京大学附属図書館について
- 3 評価期間（2013-2018年度）の主なできごと
- 4 新図書館計画

2. 学習環境整備／学習支援機能（詳細略）

3. 研究支援機能／保存・情報発信機能

- 1 学術情報基盤の整備（略）
- 2 アジア研究図書館
- 3 学術資産等アーカイブズ構築事業
- 4 オープンアクセスおよびオープンサイエンス

4. 課題と将来構想

「総合図書館視察に替えて」
でご紹介

「学術情報基盤の整備」
でご説明

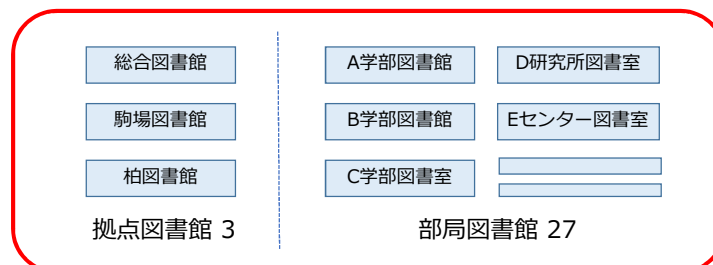
東京大学の概要

- 学生数 学部生：約14,000人 大学院生：約14,000人
- 教職員数 教職員：約8,000人（うち教員：約3,900人）
特定有期雇用教職員：約2,800人
- 組織 11学部15研究科、11附置研究所
その他（全学センター、学内共同教育研究施設、
学際融合研究施設、連携研究機構など）
- 予算規模 令和2年度収入予算：2,600億円
（うち運営費交付金：844億円）
- 所在地 日本全国に研究施設+海外拠点
本郷キャンパス（教育・研究の中核）→ 総合図書館
駒場キャンパス（入学者全員1-2年生）→ 駒場図書館
柏キャンパス（理工系実験施設・産学連携）→ 柏図書館

（東京大学の概要2020：資料編）
（東京大学ホームページ：組織構成）

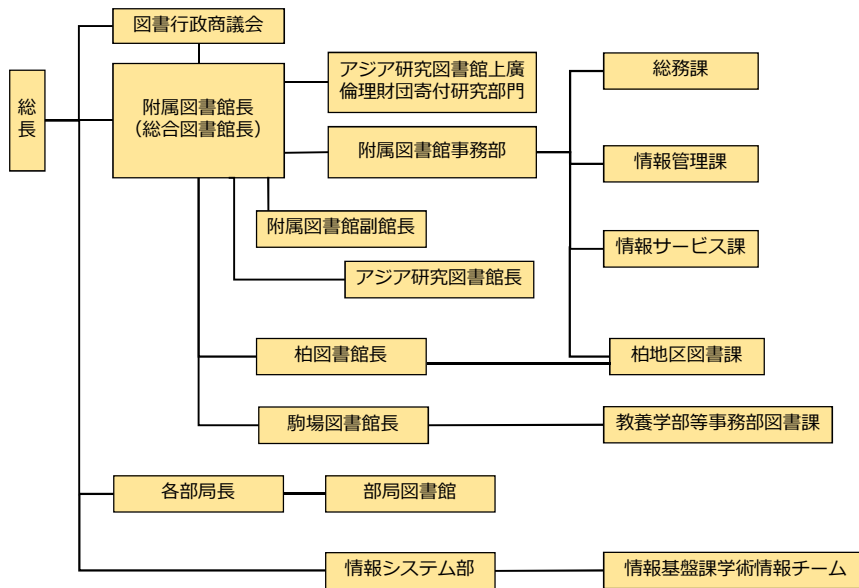
附属図書館について（附属図書館概要 p.4）

東京大学には本郷キャンパスの総合図書館、駒場キャンパスの駒場図書館（大学院総合文化研究科図書館の機能を併せ持つ）、柏キャンパスの柏図書館という3つの拠点図書館があります。また学部・研究科や研究所等に設置されている部局図書館が27館・室あり、これらを総称して「東京大学附属図書館」といいます。



「共働する一つのシステム」

附属図書館組織図 (附属図書館概要 p.11)



4

附属図書館に関する基本統計①

- 職員数
 - 全学：常勤160人／非常勤156人（※常勤には非図書系を含む）
 - 総合図書館：36人／17人
 - 駒場図書館：14人／21人
 - 柏図書館： 5人／2人 → 3館計：55人／40人（全学の3分の1）
 - 図書系職員
 - 上記の他に、情報システム部 情報基盤課 学術情報チーム：6人
 - 在籍出向（JUSTICE課長、文科省研修生）及び出向：常時10人前後
- 蔵書数
 - 全学：約981万冊（国立国会図書館 約1,135万冊※図書のみ）
 - 総合図書館：約130万冊
 - 駒場図書館：約69万冊
 - 柏図書館： 約45万冊 → 3館計：約244万冊（全学の4分の1弱）
- 入館者数（延人数）／館外貸出冊数
 - 全学：約190万人／約53万冊
 - 総合図書館：約55万人／約15万冊
 - 駒場図書館：約70万人／約18万冊
 - 柏図書館： 約3万人／約3万冊 → 3館計：約128万人／約36万冊

（令和元（2019）年度 附属図書館活動報告書）
（一部数字に修正あり）

5

附属図書館に関する基本統計②

• 電子情報資源の利用可能種類数

① 電子ジャーナル(種類)

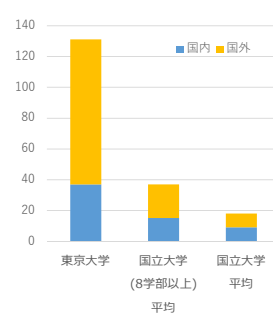
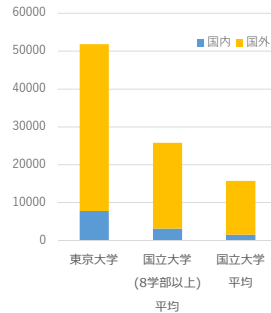
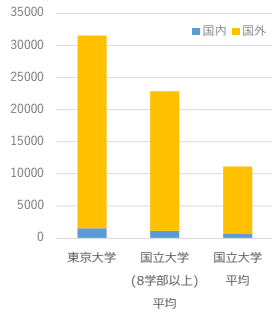
国内	1,484
国外	30,050
計	31,534

② 電子書籍(タイトル)

国内	7,723
国外	44,123
計	51,846

③ データベース(種類)

国内	37
国外	94
計	131

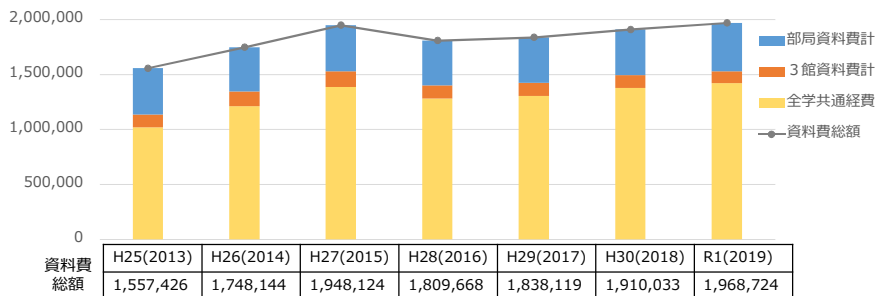


(令和元 (2019) 年度 学術情報基盤実態調査)

附属図書館に関する基本統計③

• 資料費総額

- 全学：1,968,724千円 = (A) + (B)
- (A) 全学共通経費：1,421,021千円 (部局按分負担+本部負担)
- (B) 上記以外：547,703千円
 - 総合図書館：62,094千円
 - 駒場図書館：34,291千円
 - 柏図書館：12,070千円 → 3館計：108,455千円



(令和元 (2019) 年度 附属図書館活動報告書)

評価期間の主なできごと

年度	中期目標	総長	館長	新図書館計画（施設工事関係）	その他（組織、運営、サービス等）	
H25 (2013)	第2期 ↓	浜田	古田	<ul style="list-style-type: none"> ●新図書館計画推進室設置 ●東京大学基金 寄付募集開始 	<ul style="list-style-type: none"> ●学生ボランティア組織ACS（アカデミックコモンズサポーター）発足 ◎国文研「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」参加 	
H26 (2014)		浜田	古田	<ul style="list-style-type: none"> ●基本方針「総合図書館本館改修の考え方」科所長会議で了承 ●別館新営工事着工 	<ul style="list-style-type: none"> ●寄付研究部門設置 ◎国会図「レファレンス共同DB」参加 ◎国会図「デジタル化資料送信サービス」参加 	
H27 (2015)		五神	久留島	<ul style="list-style-type: none"> ●本館改修工事（西工区） ●自動書庫調達 	<ul style="list-style-type: none"> ●ミニレクチャールーム運用（1年間） ◎ハーバード大学図書館と利用協定締結 ◎全学遊及入力計画 第3期開始 	
H28 (2016)		五神	久留島	<ul style="list-style-type: none"> ●自動書庫設置開始 ●本館改修工事（北西工区） 	<ul style="list-style-type: none"> ◎基礎的学術雑誌等整備 第3期開始 ◎教員著作物可視化事業との連携 ◎障害のある利用者への資料電子化サービス試行 ◎「オープンアクセスハンドブック」第1版公開 	
H29 (2017)		第3期 ↑	五神	久留島	<ul style="list-style-type: none"> ●新図書館計画推進室活動終了 ●5月：別館竣工 ●7月：別館ライブラリープラザ運用開始 ●本館改修工事（中央工区） 	<ul style="list-style-type: none"> ●東京大学デジタルアーカイブス構築事業開始 ◎障害のある利用者への資料電子化サービス開始 ◎「UT Repository」JAIRO Cloudへ移行 ◎附属図書館ウェブサイトリニューアル
H30 (2018)			五神	熊野	<ul style="list-style-type: none"> ●5月：自動書庫本格運用開始 ●10月：別館ライブラリープラザリニューアルオープン ●本館改修工事（書庫工区） 	<ul style="list-style-type: none"> ●アジア研究図書館長配置、同運営委員会設置 ◎基礎的学術雑誌等整備 第4期調査
R1 (2019)		五神	熊野	<ul style="list-style-type: none"> ●本館改修工事（東工区） 	<ul style="list-style-type: none"> ●東京大学学術資産等アーカイブスポータル公開 ◎基礎的学術雑誌等整備 第4期選定 	
R2 (2020)		五神	熊野	<ul style="list-style-type: none"> ●8月：本館改修工事全工区竣工 ●11月26日：開館記念式典 	<ul style="list-style-type: none"> ●10月：アジア研究図書館開館 	

8

新図書館計画「アカデミック・コモンズ」

- ・始まり
 - 2010年9月 新図書館構想検討準備部会発足
 - 2011年4月 役員会の下に新図書館担当理事懇談会発足
 - 2014年12月 別館新営工事着工式
- ・新図書館計画が目指すもの
 - ①【ハイブリッド図書館】
 - 伝統と未来が融合した新しい図書館のかたちを示す
 - ②【国際化時代の学習・研究を支える図書館】
 - 別館地下1階のライブラリープラザで学びと研究をつなぐ
 - ③【アジア研究図書館】
 - 本館4階に世界水準のアジア研究拠点を
 - ④【社会にひらく図書館】
 - 多様な人や「知」の集まる場所へ
 - ⑤【出版文化を支える図書館】
 - 別館地下には巨大な自動書庫

9

新図書館計画の成果

本館 Ⅱ期（西側エリア）完了（2015～16年度）
Ⅲ-1期（中央エリア西側）完了（2016～17年度）
Ⅲ-2期（中央エリア）完了（2017年度）
Ⅲ-3期（保存書庫）完了（2018年度）
Ⅳ期（東側エリア）完了（2019～20年度）

2020年8月末 改修竣工
9月～ 館内整備
10月1日 アジア研究図書館 4階に開館
11月26日 開館記念式典



歴史的な
継承と復元

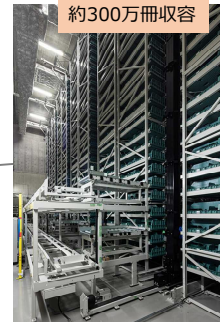
新たな機能の拡充
・アジア研究図書館
・リサーチ commons
・プロジェクトボックス
・オープンエリア 等

別館 2014年12月 起工
2017年5月 新館竣工
同7月 運用開始

ライブラリープラザ
学びと研究をつなぐ



自動書庫
約300万冊収容



10

竣工後の運用状況

- 別館 自動書庫（約300万冊）
 - ・人文社会科学系資料の保存書庫として構想
↳ 柏図書館：自然科学系雑誌バックナンバー
 - ・初期入庫計画：約120万冊（※コロナ禍のため計画に遅れ）
 - ①総合図書館資料：約58万冊（52万冊済）利用冊数：約150冊／日
 - ②全学の人文社会系雑誌バックナンバー：約32万冊
 - ③アジア研究図書館資料：約30万冊
- 別館 ライブラリープラザ
 - ・「学びと研究をつなぐ空間」として構想
 - ・可動式座席、壁面は全てホワイトボード
 - ・2018年10月～ 会話のできる学習・研究交流スペース 入館者数：約300人／日
 - ・2020年4月～7月中旬（※コロナ禍による閉館）→ 再開（会話禁止）
- 本館
 - ・「伝統と未来が融合した新しい図書館」として構想
 - ・4階に「アジア研究図書館」開設
 - ・2020年8月末竣工（※コロナ禍のため1か月遅れ）→ 臨時閉館（館内整備のため）
→ 開館しながら館内整備を継続 → 11月26日 開館記念式典

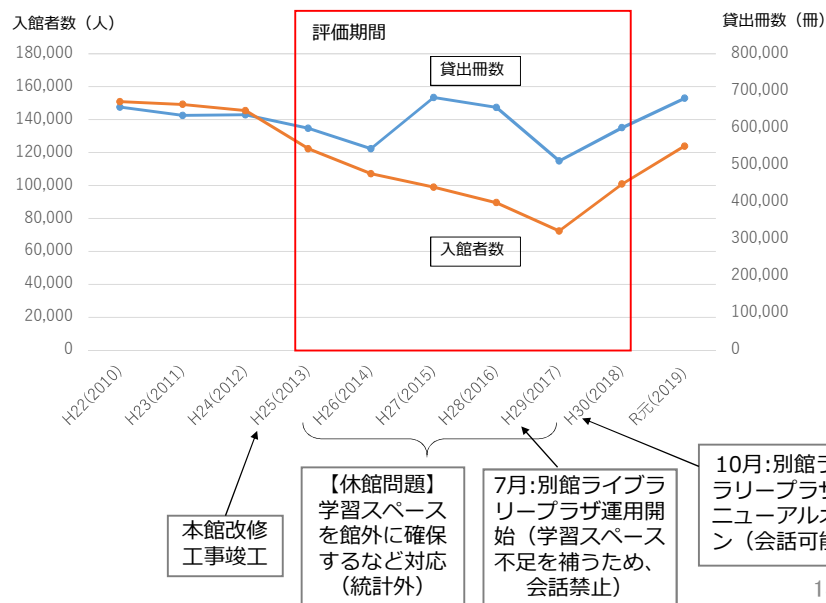
11

別館ライブラリープラザの活用

- 図書館企画
 - トークセッション：教員によるリレー対談
 - 図書館職員によるトピック講演、研究者による貴重書紹介、著者によるブックトーク
 - U-PARL（寄付研究部門）シンポジウム／アジアンライブラリーカフェ
- 学生ボランティア組織ACS（アカデミックコモンズサポーター）
 - ミニレクチャープログラム：東京大学FFP（フューチャー・ファカルティ・プログラム）を終了した院生による模擬授業
 - 近接分野座談会「おとなりさん」
 - ビブリオバトル
- ERIC（工学部の英文コンサルテーション）
- オープンキャンパス
 - 学部情報まるごとラウンジ
- 南原繁記念出版賞（東京大学出版会）
 - 表彰式・受賞者講演会

12

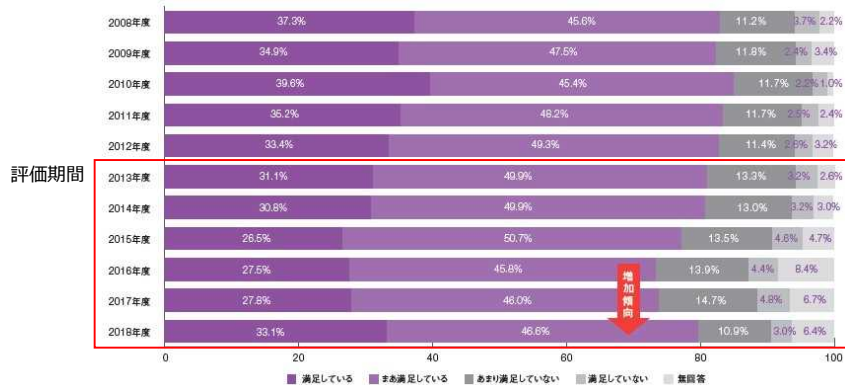
総合図書館の入館者数・貸出冊数の推移



13

(参考) 学生満足度の推移

- 図書館などの学習施設に対する満足度調査（出典）各年度「大学教育の達成度調査」
「満足している（33.1%）」と「まあ満足している（46.6%）」が、あわせて79.7%を占め、2016年度以降、満足度が増加傾向



(東京大学 統合報告書2019)

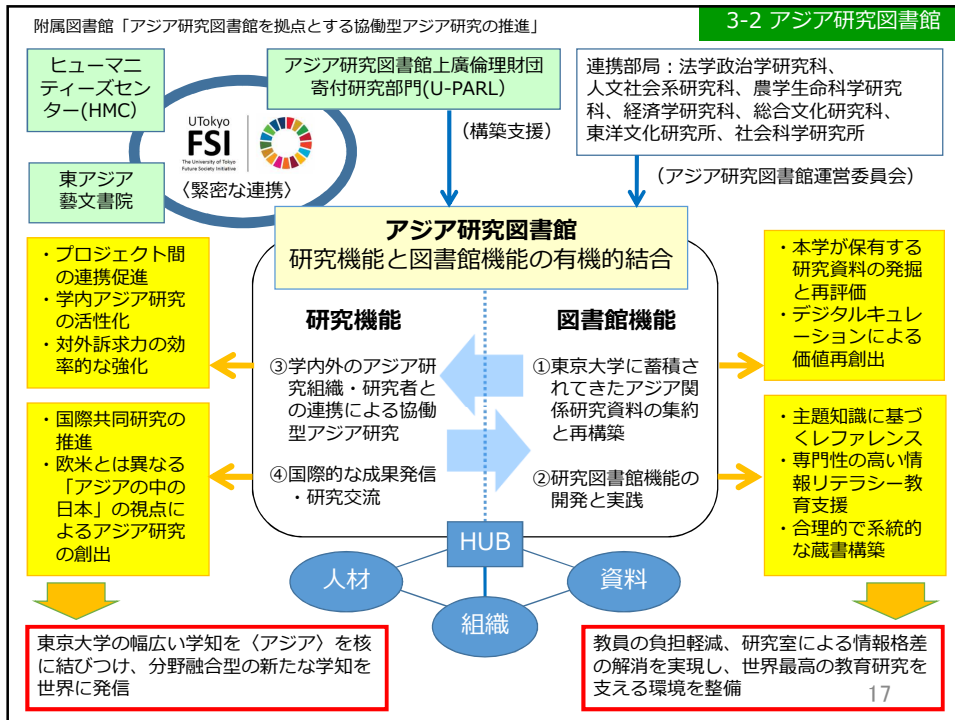
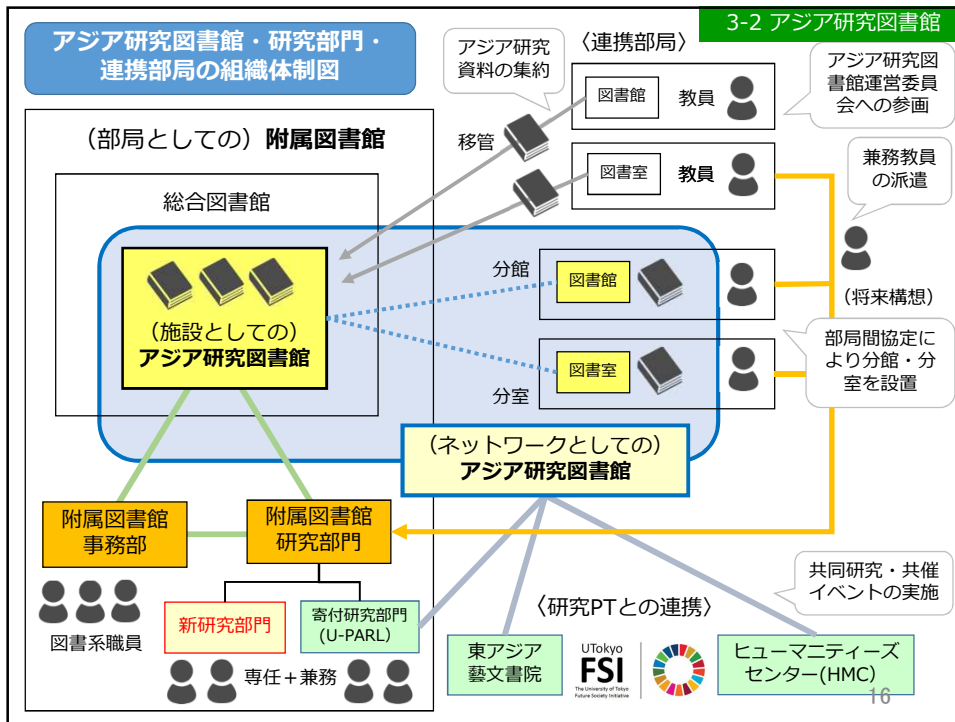
14

アジア研究図書館

- アジア研究図書館
 - 理念：東京大学に蓄積されてきたアジア関連資料を集約・再構築し、国内外のアジア研究者が集う世界最高水準のアジア研究環境の実現を目指す。
 - 本館4階に開架スペース5万冊収容（関係部局から移管）10月1日開館
→ 保存書庫・自動書庫も活用して資料集約を継続
 - 独自分類体系を使用
 - 研究機能を有する図書館を目指す（専門職の設置）
- アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）
 - 附属図書館の研究部門として、2014年度設置
 - 事業目的：
 - 共働型アジア研究拠点の形成
 - 研究図書館の機能開拓研究
 - 人材育成と社会還元
 - アジア研究図書館構築支援
 - 学内関係部局の兼務教員 + 特任准教授1、助教1、研究員
- アジア研究図書館研究開発部門（2021年4月設置予定）
 - 准教授1、助教2：サブジェクト・ライブラリアン制度の確立を目指す



15



東京大学学術資産等アーカイブズポータル 2019年6月公開
 (https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/)

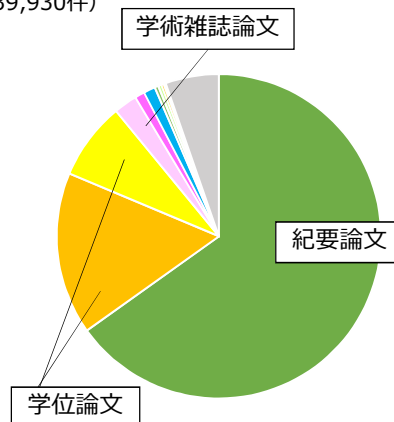


20

機関リポジトリの運用

- UTokyo Repository
 - 2017年10月 NIIのJAIRO Cloudへ移行
 - 情報システム部 (≒情報基盤センター) の予算、人員で運用
 - コンテンツ総数 54,500件 (うち本文あり 39,930件)

資源タイプ	件数	資源タイプ	件数
departmental bulletin paper	26,008	conference paper	128
thesis	6,465	book	95
doctoral thesis	3,091	conference object	42
journal article	928	learning material	24
research report	389	dataset	19
article	468	other	2,129
technical report	144	合計	39,930

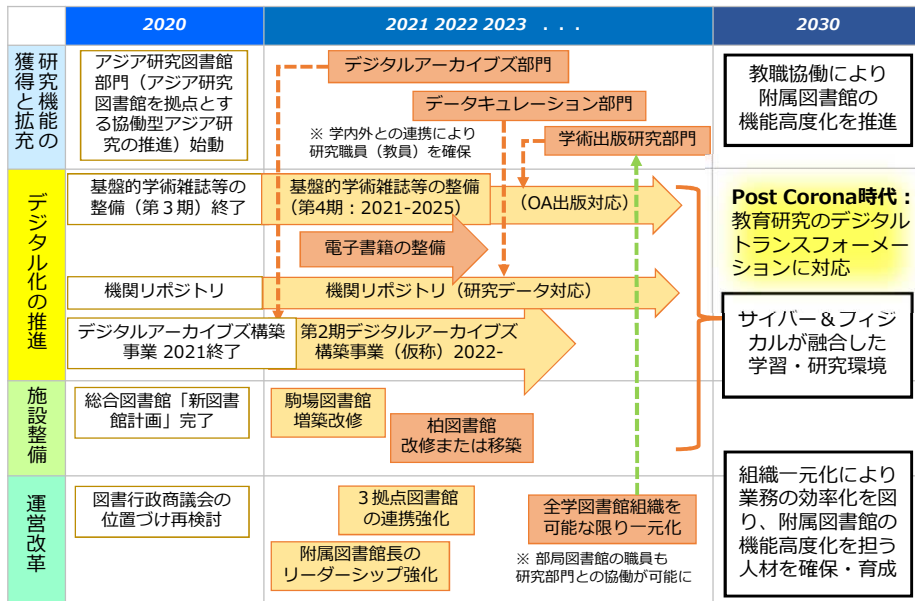


21

オープンアクセスおよびオープンサイエンス

- オープンサイエンスの推進
 - ・ UTokyo Repositoryによる学術雑誌論文のエビデンスデータの受付開始
(現行システムで対応可能なデータに限る)
 - ・ 定量生命科学研究所の研究公正管理システム (IQB-RIMS) 開発に協力予定
- 東大附属図書館の取り組み
 - ・ 「オープンアクセスハンドブック」
2017年3月 第1版 → 2017年10月 第2版
 - ・ 「東京大学オープンアクセスおよびオープンサイエンス方針 (案)」
2017年1月 図書行政商議会承認
→ 「東京大学の研究成果の蓄積と公開の強化に向けて」に改訂、役員懇談会承認
2020年1月 図書行政商議会承認

附属図書館 未来構想：2020-2030



(2020年6月作成 一部修正)

拠点図書館の現状と課題

駒場図書館

- ・駒場キャンパス（総合文化研究科等）の教育研究支援
- ・全学の学部1-2年生のための学習図書館
- ・初年次ゼミナール（新生必修授業）や全学自由研究ゼミナールへの協力

（課題）

- ・書庫の狭隘化、閲覧席数の不足
- ・新たな学習形態への対応不足

→ 令和3年度（2021）改修増築概算要求



（2002年3月竣工）

柏図書館

- ・柏キャンパス（新領域創成科学研究科等）の教育研究支援
- ・100万冊自動書庫（全学の自然科学分野の雑誌のバックナンバーセンター）
- ・地域貢献：柏図書館友の会

（課題）

- ・空調装置の老朽化
- ・水害頻発

→ 改修か移転か



（2004年2月竣工）

学術情報基盤の整備

2020年10月29日
東京大学附属図書館 外部評価委員会
情報管理課長 久保田壮活

内容

学術情報基盤の整備（特に電子ジャーナルを中心に）

1. 全学共通経費による基盤的学術雑誌等の整備
 - 1 概要
 - 2 第1期～第3期の変遷
 - 3 現状
 - 4 第4期(2021～2025) の概要
2. オープンアクセスへの対応
 - 1 SCOAP³への参画
 - 2 Read & Publish契約の導入(CUP等)
 - 3 課題

1-1 全学共通経費による基盤的学術雑誌等の整備 概要

- 学術雑誌等の基盤的学術情報を**安定的・継続的**に整備することを目的に平成19年度（2007年度）から運用
- 整備対象：雑誌（電子、冊子）、データベース、大型コレクション
- 1期あたり4～5年単位の中期的整備計画
財政的な仕組みを大学執行部、各部局の合意のもとに策定
- 大学本部及び各部局の負担金を財源のベースとする
- 今年度は第3期（2016-2020）最終年

現制度のポイント

- 1) 期中の価格上昇に対応
- 2) ただし、各部局負担額は期中固定
- 3) 整備対象タイトルの期間中購読継続を原則（追加、入替行わない）
 - ・複数年購読の導入により、購読料上昇の抑制が可能
 - ・タイトル見直しの作業等、研究者・事務双方の業務量削減
 - ・新刊タイトルの期中新規購読が難しい

2

1-1 全学共通経費による基盤的学術雑誌等整備 概要

• 資料費総額（2019年度）

- 全学：1,968,724千円 = (A) + (B)
 - (A) **全学共通経費：1,421,021千円（部局按分負担+本部負担）**
 - (B) 上記以外：547,703千円
 - 総合図書館：62,094千円
 - 駒場図書館：34,291千円
 - 柏図書館：12,070千円 → 3館計：108,455千円

第1期(2007-2011)	11.5億円/年	2016	12.8億
第2期(2012-2015)	11.5億円/年	2017	13.1億
第3期(2016-2020)	11.5億円/年+α	2018	13.8億
第4期(2021-2025)	11.5億円/年+α	2019	14.2億

3

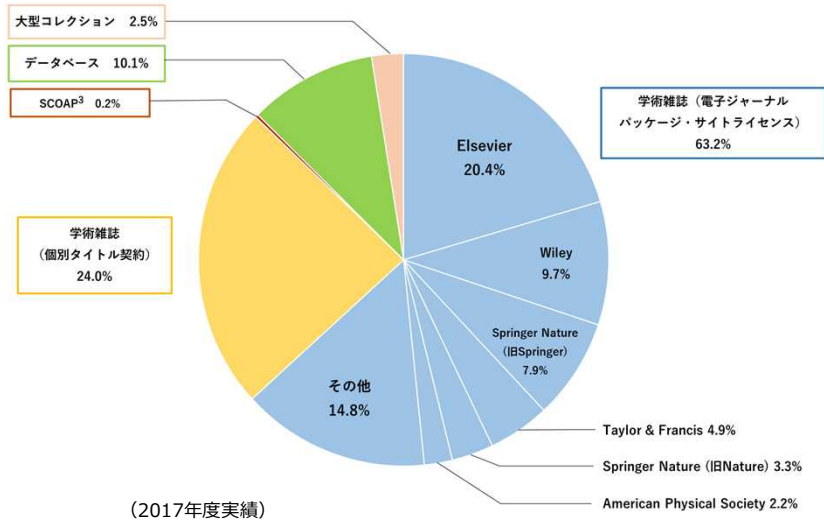
1-2 全学共通経費 第1期～第3期の変遷

期	第1期 (2007～2011)	第2期 (2012～2015)	第3期 (2016～2020)
対象資料	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学術雑誌 (冊子、電子) ・ データベース ・ 大型コレクション 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学術雑誌 (冊子、電子) ・ データベース ・ 大型コレクション 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学術雑誌 (冊子、電子) ・ データベース ・ 大型コレクション
財源	<ul style="list-style-type: none"> ・ 11.5億円/年 本部負担：3.0億円 部局負担総額：8.5億円 ・ 各部局の負担額は対象資料の購読実績による 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 11.5億円/年 本部負担：3.0億円 部局負担総額：8.5億円 ・ 各部局の負担額の算出方法変更。予算規模と構成員数に比例して分担。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 11.5億円/年±α 本部負担：3.0億円 部局負担総額：8.5億円 不足額は、第3期期間中平均5.8億円/年と試算
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対象は、第1期開始直前の時点で、各部局で購読していた学術雑誌 (冊子) 8,684誌 + 全学利用可能な形態で契約していた電子ジャーナル7,468誌 ・ 全学利用可能なデータベース：57種 ・ 複数部局で利用が見込まれる一次資料等 (大型コレクション) で、部局での予算措置が困難なもの 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的に第1期対象資料を継承 (一部、タイトルの入れ替え実施) ・ 電子で利用可能な冊子体を整備対象から除外とすることで経費削減を実現 ・ 学術雑誌 (冊子・電子ジャーナル) 18,260誌、データベース70種を選定 ・ 円高により外国雑誌等の支出が抑制されたことで結果的に第1期の予算規模を維持 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経費抑制の観点から整備対象資料に係る調査を実施 ・ 急激な円安や海外の電子商品に対する課税等の影響により、対象資料の縮減、重複購読の廃止、予算増 (二次配分) により対応 ・ 最終的に、学術雑誌 (冊子・電子ジャーナル) 12,778誌、データベース63種に縮減して選定

4

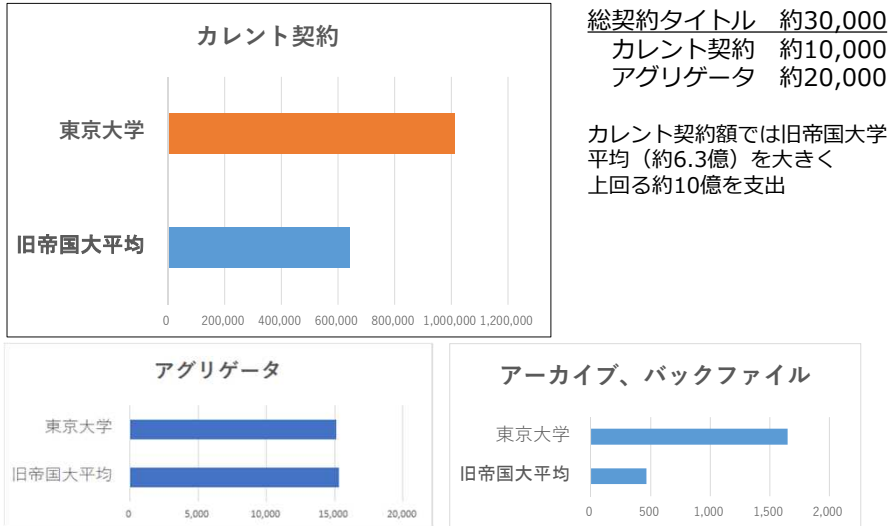
1-3 全学共通経費 現状

全学共通経費 (第3期) 資料別支出割合



1-3 全学共通経費 現状

電子ジャーナル契約実績



「電子ジャーナルに係る実態調査」文部科学省ジャーナル問題検討部会（第3回）2020年6月15日 資料を元に作成

6

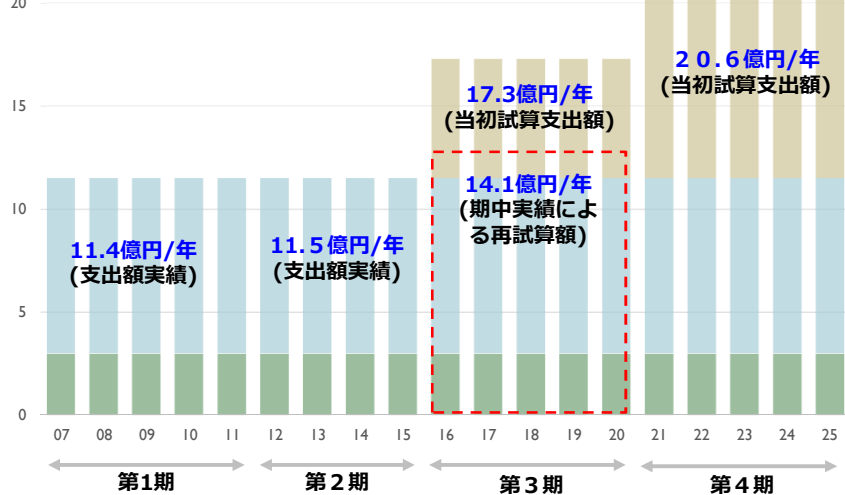
1-4 全学共通経費 第4期（2021-2025）の概要

期	第3期（2016～2020）	第4期（2021～2025）
対象資料	<ul style="list-style-type: none"> 学術雑誌（冊子、電子） データベース 大型コレクション 	<ul style="list-style-type: none"> 学術雑誌（冊子、電子） データベース 大型コレクション
財源	<ul style="list-style-type: none"> 11.5億円/年 + α → 17.3億円(当初試算) 約14億円(実績予測) 本部負担： 3.0億円 部局負担総額： 8.5億円 不足額を二次予算配分措置 不足額は、第3期期間中平均5.8億円/年と試算 	<ul style="list-style-type: none"> 11.5億円/年 + α → 20.6億円(試算) 本部負担： 3.0億円 部局負担総額： 8.5億円 不足額を二次予算配分措置を想定 不足額は、第3期期間中平均9.1億円/年と試算
概要	<ul style="list-style-type: none"> 経費抑制の観点から整備対象資料に係る調査を実施 急激な円安や海外の電子商品に対する課税等の影響により、対象資料の縮減、重複購読の廃止、予算増（二次配分）により対応 学術雑誌（冊子・電子ジャーナル）12,778誌、データベース63種に縮減して選定 	<ul style="list-style-type: none"> 本学の研究・教育活動にとって不可欠なタイトルを整備対象資料とするための調査を実施 従来の購読モデルを継続 大手出版社のパッケージ契約を維持 OA化の動向については、学内外での情報収集や連携を進め状況の進展があった場合対応を協議 学術雑誌（冊子・電子ジャーナル）13,254誌、データベース67種を選定

7

25 1-4 全学共通経費 第4期（2021-2025）の概要

全学共通経費 予算規模（各期の平均額）の推移



8

2 オープンアクセスへの対応

- 1 SCOAP³への参画

- ・ CERN(欧州原子核研究機構) が主催する高エネルギー物理学分野の主要雑誌のOAを目指す国際連携イニシアティブ
- ・ 日本ではNII、KEK、国公私立大学図書館協力委員会の連携・協力の下、本学をはじめ60以上の大学図書館が参加

- 2 Read & Publish契約の導入 (Cambridge University Press(CUP)等)

- ・ 従来の購読料にOA出版のための追加経費を支払うことでOA論文の出版が可能に
- ・ CUPのR&P契約を2020年から導入
本学所属研究者の論文投稿料が対象タイトルに無制限でOA論文出版可能
→ 2020年1月～ 10件以上利用実績

- 3 課題

- ・ 本学研究者のA P C支出実績額や財源の把握
- ・ 本格的なOA出版契約の検討に向けた調査検討体制の整備
- ・ 関係部署等との連携強化

9

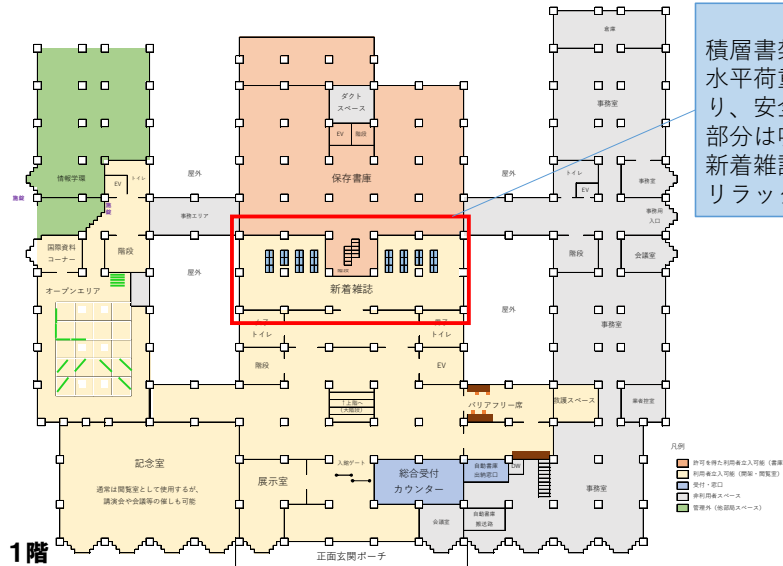
2 オープンアクセスへの対応

論文公表数 著者所属機関別集計(2017)

順位	大学名	公表論文数	フルOA		ハイブリッドOA		ブロンズOA 論文数
			OA論文数	APC支払 推定額 (円)	OA論文数	APC支払 推定額 (円)	
1	東京大学	3,378	721	148,007,720	164	42,343,940	524
2	京都大学	2,750	503	95,862,834	90	23,864,091	417
3	大阪大学	2,091	401	78,221,615	101	26,721,794	297
4	東北大学	1,939	367	66,612,221	74	17,380,966	362
5	九州大学	1,782	331	60,432,897	78	20,334,536	269
6	北海道大学	1,645	333	60,373,897	57	16,527,301	256
7	名古屋大学	1,599	282	52,284,670	61	15,774,134	244
8	慶應義塾大学	1,033	264	53,113,694	48	13,015,396	169
9	東京工業大学	1,033	133	24,386,535	16	3,768,302	169
10	広島大学	954	191	31,941,586	37	10,130,540	142

(JUSTICE 論文公表実態調査2019年度)

1F 新着雑誌・新聞閲覧室



新着雑誌新聞雑誌閲覧室から積層書庫を臨む

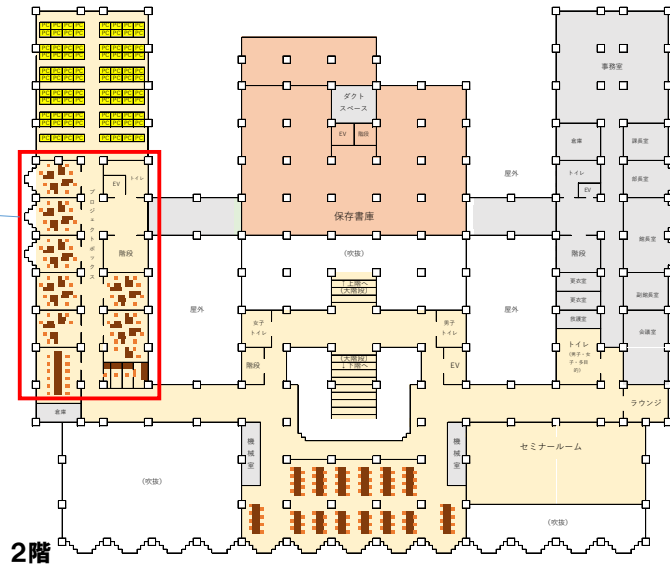


壁の一部をガラスにして、総合図書館の歴史が詰まった書庫および書庫の特徴的な鉄骨階段を臨めるデザイン。



2F プロジェクトボックス・防音ブース

学外との連携プロジェクトも含め、集中的な討議・作業等が必要となる中小規模のグループに貸出。空きがある場合は、学生のグループ学習室（遮音性により別館ライブラリープラザとは異なる需要に対応）として開放。



2F プロジェクトボックス



部屋の広さは25㎡から50㎡までいくつかのサイズがあり、室内の什器も、様々なものを用意。

2F 防音ブース



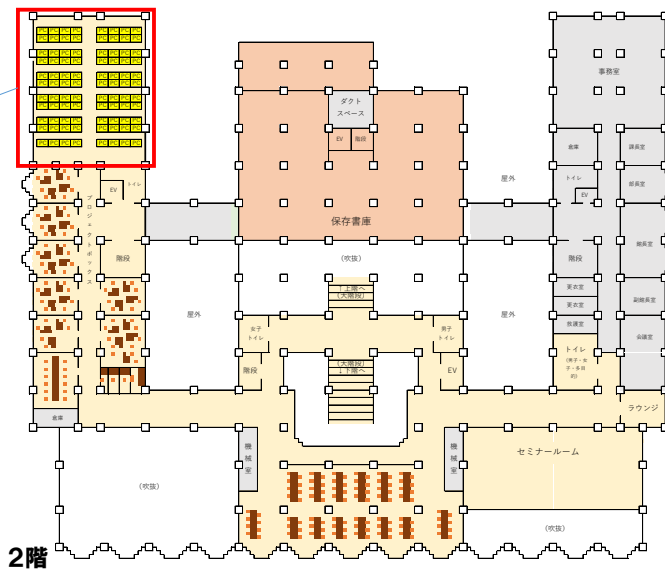
語学学習、プレゼンテーションの練習など、音声を発する個人活動に用いる部屋。

プロジェクトボックスと防音ブースは、本学のIDを用いてWEBから予約を受け付ける。

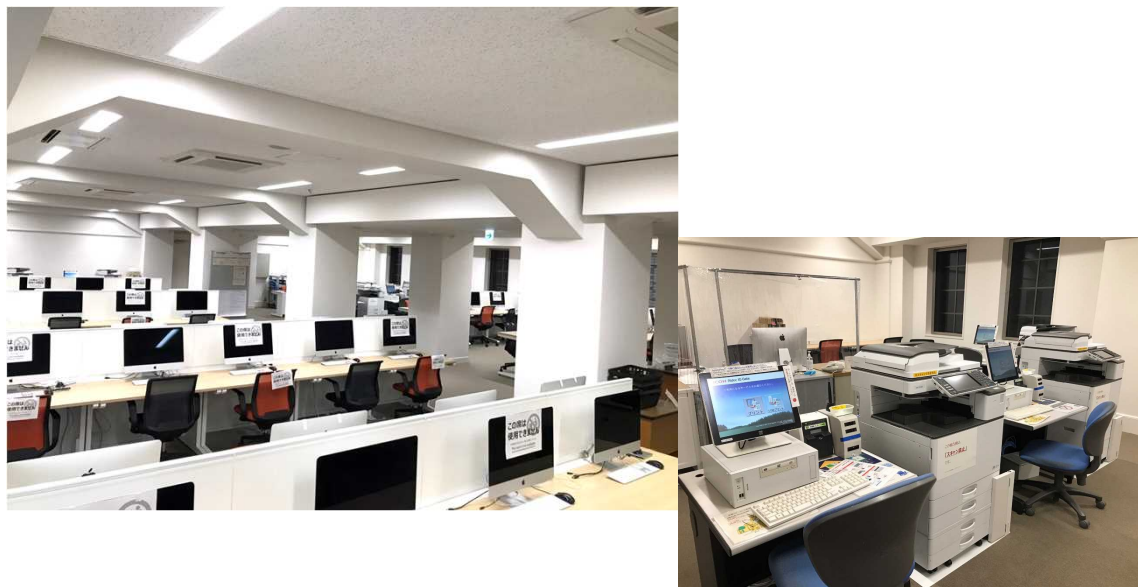


2F ECCSルーム

本学の教育用計算機端末を、70台設置。
データベースの利用、論文の執筆、プリントアウトなどが可能。

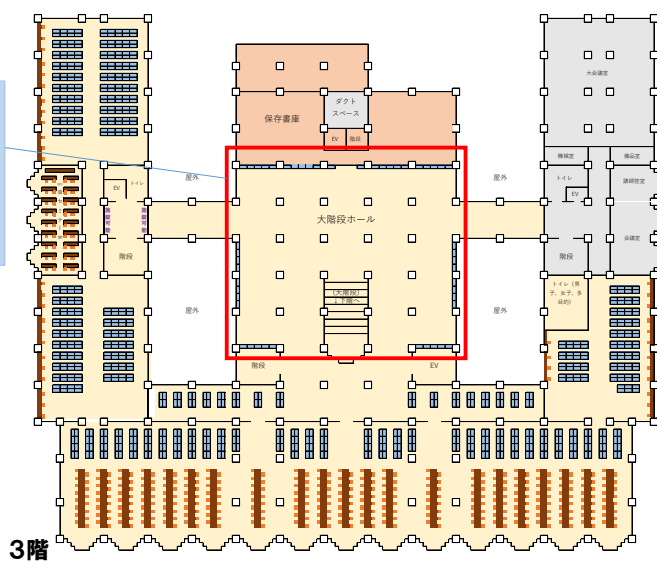


2F ECCSルーム



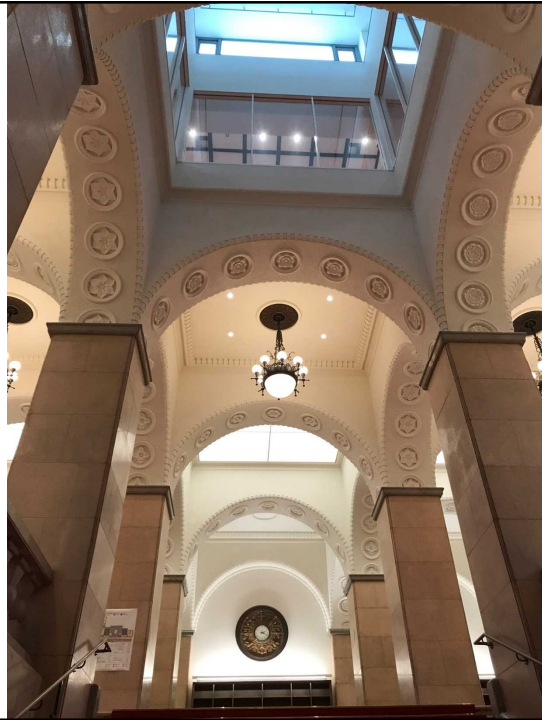
3F ホール

大階段を上ると広がるホールは、改修工事においては、記念室同様、歴史的な保存を意識し、意匠の復元を重視した。



3F ホール

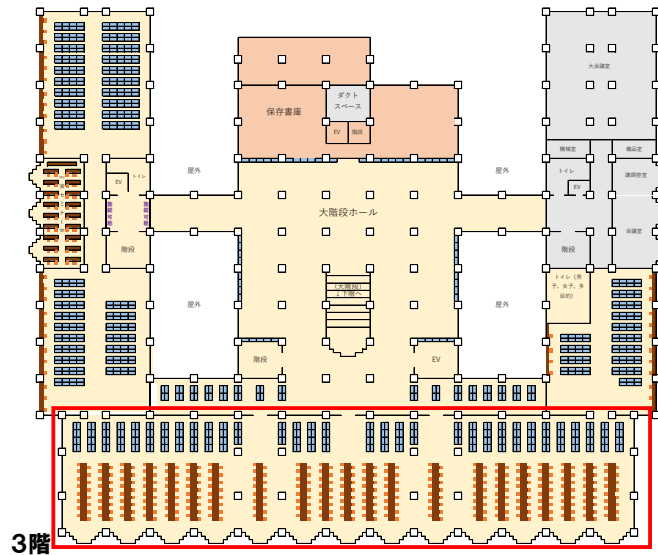
階段の上には、創建当時の吹き抜けを復元



ホールの周辺は、書架を設置し、本学の知の象徴的な空間として、図書の企画展示などに用いる予定。

3F 大閲覧室

北側の大閲覧室は、
総合図書館で一番大
きな閲覧室。

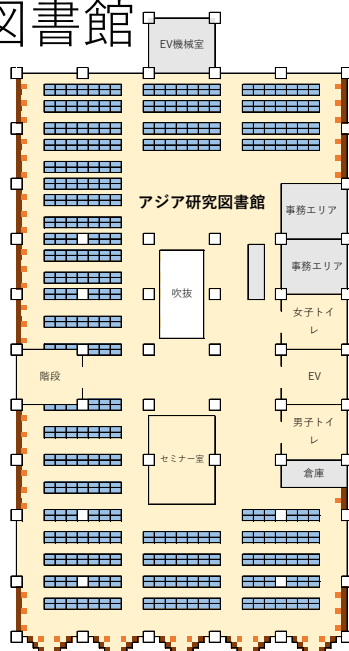


3F 大閲覧室

創建当時から使用しつづけて古くなってきた机を、東大
基金のプロジェクトで寄付を募り、照明の笠を美しく修
復するとともに、持ち込みPCのための電源設置など、現
在のニーズに合わせた改修も行った。



4 F アジア研究図書館



4階は全体が、今年の10月に新しくオープンした、アジア研究図書館のフロアである。学内のアジア関係資料を可能な限り集中運用して、利用者に対して総合的で効率的な図書館サービスを提供することを目指す。

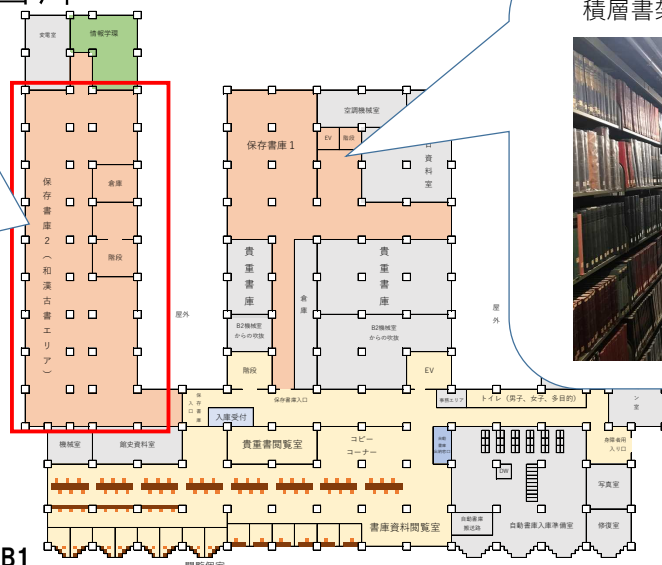
4階のフロアは、基礎的な研究書や参考図書5万冊配架でき、今後自動書庫も活用して、さらに研究資料の集約を進める計画。

4 F アジア研究図書館

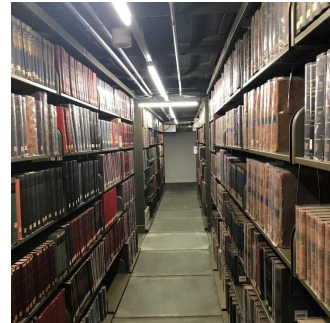


B1 保存書庫

保存書庫 2 (和漢古書エリア)



保存書庫 1 (従来からある積層書架)



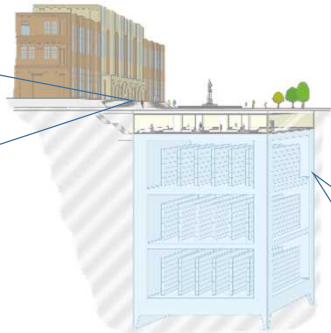
新図書館計画での別館自動書庫の建築に伴い、書庫は、保全に注意を要する資料を収蔵する保存書庫と位置づけられた。さらに和漢古書類は、特に注意を要する資料として、地下の東側に集約した。

B1 和漢古書エリア



別館B2～B4 自動書庫

出納ステーション



東京大学の各図書館・室の狭隘化、必要な資料の迅速な取り寄せ、本郷キャンパス建築スペースの不足を実現するため、図書館前広場の地下に建設された。

地下46メートル、300万冊が収容可能



本館カウンターで利用者へ



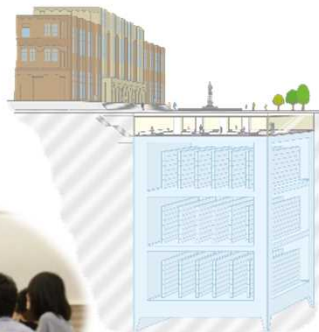
資料は自動で地上へ運ばれ



利用者が本館内のOPACからリクエスト

別館B1 ライブラリープラザ

多様な学習スタイルに対応するアクティブラーニングスペース。グループ学習やプレゼンテーション、セミナーなどが活発に行われている。



広場の噴水の下に位置する円形のスペース。円形の壁面はホワイトボード。



以上で総合図書館のご案内を終わります。
ありがとうございました。

